

T. リコーナにおける道德教育の 11 原理の検討 家庭教育を中心にして

倪 冬 岩

要 旨

本論文は通过对美国教育家 Thomas Lickona 撰写的 Educating for Character(1991)和 Character Matters(2004)两册著书中关于家庭教育的论述进行比较, 从中找出 Lickona 在这两册著书中关于家庭教育中家长对孩子的品德成长所起到的作用的这一观点上的异同点, 以及在 Character Matters 中论述的道德教育的 11 条原理进行探讨的研究。通过比较和研究发现, Lickona 对家庭教育中家长在孩子的品德教育中应尽的教育职责非常重视。在 Educating for Character 中, Lickona 对家长因为没有尽到应尽的职责而对孩子的成长所起到的负面影响作了论述。在 Character Matters 中, Lickona 提出了道德教育的 11 条原理, 对怎样提高家长对孩子的品德教育的意识, 以及怎样对孩子进行品德教育的方法做了详细的论述。这 11 条原理, 也是为提高家长的道德水平以及提高家长的教育方法所制定的高标准。在培养孩子的责任感这种教育方法的基础上, Lickona 非常重视培养孩子的正确判断的教育方法。

キーワード……道德教育の 11 原理 品性教育 家庭教育

一 研究の目的と方法

家庭において子どもに対する道德教育を重視すべきという観点は、決して新しいことではない。中国においても、昔からそうである。一般の常識では、親は子どもの最初の教育者であり、子どもの最初の道德教師でもある。子どもにとって、学校の教師は毎年変わることがあるが、成長するあらゆる歳月には少なくとも同じ親のいずれかとはだいたい一緒である。それゆえに、親が子どもに与える道德的影響は、学校の教師と比べて、永続的である。

T. リコーナ(Thomas Lickona ; 1942 ~)が家庭における道德教育について言及している文献は 3 冊ある。

Raising Good Children From Birth Through Teenage Years (1983)。

Educating for Character How Can Our Schools Teach Respect and Responsibility (1991)(以下 EC と略する)。

Character Matters How To help Our Children Develop Good Judgment, Intergrity, And Other

T. リコーナにおける道徳教育の11原理の検討(倪)

Essential Virtues (2004) (以下 CM と略する)。

この論文では、と の文献で研究を発表する。 の文献は、道徳性の発達段階を述べているものであるが、リコーナがその研究を変化させているので、別稿で改めて研究をする。

リコーナのこの二冊の著書の中で論述された家庭教育の中心点は違う。1991年に出版された EC の中で、リコーナは、この著書を著していた頃のアメリカの家庭の状況、すなわち、離婚により家族の変化によって子どもに及ぼした影響と、親子が親密な関係を持たなくなっているという状況、さらに家庭(home)から学校に対する支援が少ないという状況に対し、「学校が教える価値が家庭で支持されていなければ、子どもの品性に永続的な影響を及ぼす可能性は減らされる。この理由から、学校と家族(families)は協力しあわなければならない」¹⁾と強く主張している。私は、リコーナがこの著書で、家族の立場ではなく、学校の教師の立場に立ってこの観点を主張していると理解している。

2004年に出版された CM の中で、リコーナは EC の中での観点を変えずに主張し続けているが、家庭の立場、特に親の立場に立って、子どもの品性を発達させることに親がいかに役割を果たせるかについて、子どもの「品性の発達の過程もまた家庭から始まるのである」²⁾、「子どもたちのことをあなたの第一の優先事項にせよ」³⁾と論述するようになってきている。

それゆえに、本論の研究目的は二つある。一つは、リコーナがこの二冊の著書で家庭教育についての考えを述べているので、それを対比することで、氏の考えの相違点(変化)を見つけることである。もう一つは、リコーナが CM の中で論じている道徳教育の11原理を検討することである。

先行研究は、文献検索をしてみたが、リコーナの品性教育(character education)の思想に関する論文はあるが、リコーナの家庭における道徳教育の論文は、見つからなかった。そこで、本論文では、この二冊のリコーナの著書に論述された家庭教育、すなわち、リコーナが EC の中で述べているアメリカの家庭の状況、及び CM の中で述べている子どもの品性を発達させるために、親の子育て意識と責任感を強めるということを中心にして、リコーナの家庭における道徳教育に対する考えを吟味していきたい。なお、学校と家族との協力関係についてのリコーナの見解は、この論文で論究しない。

二 アメリカにおける家庭の状況

家庭教育について、EC の中で、リコーナはまず家族の役割(family's role)を論述している。そして、アメリカの家庭の状況によって、すなわち、家族の変化によって子どもにもたらされる影響と、子どもが親との間の親密な関係を失ったとき、親が果たしていない役割は何であるのかを説明している。

1 家族の役割

子どもの品性を発達させることに学校は重要な役割を果たしているが、すべての仕事ができるわけではないであろう。子どもの品性を発達させるのに、学校の役割と同じく重要なのは家族の役割である。なぜなら、「家族は子どもが会う最初の道徳教育家(moral educator)である。両親は自分の子どもたちの最初の道徳教師(moral teachers)となる。彼らはまた最も永続的な影響を子どもに与える」⁴⁾からである。

リコーナが考えている家族の役割はいったい何であるのか。

リコーナは、「親子関係には、特別な情緒的な意味があり、愛され、価値ある者とされていると子どもに感じさせるか、あるいは愛されていない、大事にされてもいないと子どもに感じさせるものである。結局、親は、人生の意義のビジョンや道徳的生活を支える究極的な根拠を提供する広大な世界観の一部である道徳を教える立場にある」⁵⁾と述べている。

「親たちがいかに子どもたちに親たちの権威を尊重することを上手に教えるのも、将来の道徳的成長に基盤を据えることになる」⁶⁾。

ここで、リコーナは、「権威的」(authoritative)親と、「自由放任の」(permissive)親、及び「権威主義的」(authoritarian)親を比較している。

「権威的」親：子どもに服従を求めるが、自分たちの要求に明確な理由を与える。

「自由放任の」親：ルール設定や宗教・道徳上の罪の言及を嫌う。

「権威主義的」親：コントロールの面では厳しいが、ルールの説明や従順をすすめる際の理由づけではあまりはっきりしない。

リコーナは、「そのうち最も効果的であるのは、『権威的』親で、自分たちの要求に明確な理由をつけて、子どもに服従を求める親であるが、結局、子どもは道徳の原理的説明(moral rationale)と自分で責任を持つ行為を内面化する」⁷⁾と述べている。

したがって、リコーナが考えている家族の役割は、子どもを愛し、子どもを大事にし、そして子どもの模範になって、子どもに道徳を教え、さらに子どもに親の権威を尊重することを教えるということである。

2 家族の変化

家族は子どもを道徳面で社会に通用するおとなにしていく者として、否定しがたい影響を与えてきた。しかしながら、今、家族は変化の過程にある。家族の変化といえば、離婚による家庭の崩壊である。

リコーナが EC を著した頃のアメリカの家庭は、合衆国の二組の夫婦のうち一組は離婚に終わっている。ばらばらになった子どもの約 60% はひとり親家庭で残りの幼児期を過ごすという

ような状況であった。

家庭の崩壊によって、子どもにもたらされる影響は誰の予想よりも甚大である。リコーナは、「崩壊した家庭と外部の関与からのストレスは子どもたちが受ける損失を与える」⁸⁾と述べている。親の離婚によって、大多数の子どもたちは落ちこぼれのコースを歩んでいたことは予想しえないことであった。子どもたちの兆候は以前より悪くなってきた。親が離婚後の5年目の兆候として、それまで成績がすべてAであった生徒たちは学校で問題を起こし始め、おとなしくて、行儀のよかった男の子たちは、過激ないじめっ子となった。5年目と10年目の両者の兆候として、子どもたちの三分の一以上が薬物、アルコール中毒、うつ状態、あるいは性の乱れのいずれかに苦しむようになってきている。

対照的に、子どものニーズを満たそうと専念に頑張っているひとり親も多い。このような親たちは子どもとの遊びの時間を設定し、プライベートな会話をし、宿題の相談にのり、子どもの生活から離れないようにし、良い価値を教えようとしているそうである。リコーナは、このようなひとり親の努力を認めている一方、「これに比べると、ふたり親家族は子どもにそれほどのかかわり方をあまりしていない」⁹⁾と指摘している。

また、「大勢の親は多忙なスケジュールのもとにあり、親子差し向かいのコミュニケーションを図れない場に子どもを置いている」¹⁰⁾。

それゆえに、家庭の崩壊によって、子どもにもたらされる影響の甚大さは明らかである。薬物やアルコール中毒、及び性の乱れというアメリカにおける青少年の問題をもたらす原因のひとつは、家庭の崩壊によって、子どもが家庭で親からの愛を感じなくなり、親からの道徳や学習の指導を受けなくなるのである。それは、子どもを愛し、子どもに道徳を教えるという家族の役割を果たしてないのである。

3 親子が親密な関係を持たなくなる

家庭は、親と子どもと一緒に食事をしたり、コミュニケーションをしたりする主な場である。家庭生活を通して、親は子どもを愛し、子どもに価値を教え、子どもの考えを聞くことによって、子どもの行動を把握し、不正行為から遠ざけさせることができるようになる。結果として、子どもは、親からの愛を感じることによって、親を愛し、親からの道徳や学習の指導を受けることによって親がもつ権威を尊敬するようになる。

しかしながら、「子どもが親との間に親密な関係を失うとき、また家族の持つ価値と自分のそれが一致なくなると、彼らは仲間のプレッシャーをきわめて受けやすくなる」¹¹⁾。

親子が親密な関係を持たなくなるということの原因について、リコーナは、親たちが「自分自身の価値の混乱、他の親のもっともらしい手抜き加減、自分の子どもたちが親の助言、あるいはコントロールを受け入れないことを恐れるため、多くの親は子育ての決定的な必要物 自

分自身の権威(authority)に対する自信を失ってしまった」¹²⁾と述べている。

この著書 EC の中で、リコーナは、親子が親密な関係を持たなくなると、子どもが仲間のプレッシャーをきわめて受けやすくなるという結果、及び親が自分自身の権威に対する自信を失うという原因を述べている。いかに「権威的」親になるか、すなわち、親が自分自身の権威に対する自信を持つようになることについて、リコーナは、CM の中で述べている道德教育の 11 原理で詳しく説明している。

以上述べたように、親子の親密な関係を失うと、子どもの道德的成長に甚大的な影響を与えてくることを明らかである。

三 家庭教育についての考え方

2004 年に出版された CM の中で、リコーナは、「私たちが維持したり、子どもたちに教えたりする標準(standards)を含む私たちの子育ては、子どもたちの道德の発達と行動に深い影響を与える。私たちが高い標準を設定しなければ、子どもたちは、未成熟な欲求や、仲間と文化からの消極的なプレッシャーに見捨てられるであろう」¹³⁾と述べている。

リコーナが述べている「標準」、あるいは「高い標準」は何であるのか。ここで、氏は書いてない。このような疑問を持ちながら、私はこの著書からリコーナの家庭教育についての考え方を見つけていきたい。

家庭における子育ては、子どもたちの学習や規律ある生活態度に影響を与える。しかしながら、リコーナは、家庭という「大変重要な領域において、数多くの家族が子どもたちのニーズに応えていない」¹⁴⁾と指摘している。

現代では何百万人もの子どもたちがひとり親の家庭で育っている。このようなひとり親の子どもたちには通常父親がいない場合が多く、貧困な生活を送っている。裕福で何の問題もない家庭をはじめ、あらゆるタイプの家庭において、子どもと過ごす時間や子どもへのガイダンス・約束事などが減少しているのである。テレビを観すぎることによって子どもの攻撃性が高まり、学問(academic)が低下することを知っていながら、子どもたちは学校と宿題の合計時間よりも長くテレビを観ることを許可されているのである。

これらの家庭内部の原因のほか、家庭外部の原因もある。

「以前と比べると、祖父母や親戚、また協力的な近隣などの子育ての仲間は減り、有害なメディアや過剰に許容的(overpermissive)な親、生活費を十分に支給できない経済体制などのいわゆる子育ての敵が増加しているので、子育ては年々困難になっている。また、昔に比べて、家庭のストレスが増え、子どもたちの環境には数多くのマイナスの力が働いているため、本気になって家庭生活を作り上げる意識を強め、道德的な子どもを育てるように注意しなくてはいけない。現代の道德環境からでは、善い品性が自然と身につくことはない」¹⁵⁾。

T. リコーナにおける道徳教育の11原理の検討(倪)

家庭こそが子どもの知性と道徳性の発達に基礎となるのであるから、子どもの品性と学問を高めるために学校ができるもっとも重要なことは、親が良い親になることを支援してあげることなのである。したがって、親にとって、「子どもたちのことはあなたの第一の優先事項にせよ」¹⁶⁾とリコーナは主張している。

この著書 CM で、リコーナは、調査研究や長年の経験によって裏付けられた道徳教育の11原理を紹介している。これらの原理を実践するのは大変であるが、品性のある子どもを育てるのにとっても効果がある。

私は、リコーナは分けていないが、これらの道徳教育の11原理を親自身の子育て意識や自身の道徳性のレベルを高めることに関わる原理と、子どもの道徳性を高めるのに親が子どもに教えるべきことや教え方に関わる原理の二つに分けて吟味していきたい。

1 品性を育てることを優先する

多くの親は、子どもが良い成績をとり、高い自尊心を持つことが重要であると考えている。しかしながら、実際には、子どもの品性、つまり子どもがどのような人物になるのかの方が、すばらしい充実した人生を送るためには、より重要なのである。

子育ての上手な親は、自分が子育てをしていることをしっかりと意識している。また、そのような親は、子どもがいずれおとなになることを考えている。「このことは、私たちが長期的な視野を持たなくてはならないことを意味している」¹⁷⁾。「品性は毎日の習慣によって形成される。児童期や青年期の習慣が成人になっても続くことはよくあることである」¹⁸⁾。

それゆえに、子どもの善き品性を育てるために、親は日常生活から子どもに良い習慣を形成することは大事なことである。

2 権威のある親になる

「親は確固とした道徳上の権威となり、つまり子どもから尊敬され、子どもが親の言うことを聞くようにならなくてはなりません」¹⁹⁾とリコーナは述べている。

ここで、リコーナは、子育て(parenting)の三つのスタイル、「権威的親」と「権威主義的親」、及び「自由放任の親」を紹介している。

「権威主義的な親」: 命令と脅しを多用して、子どもに理由を説明することがほとんどない。

「自由放任の親」: 子どもをかわいがってばかりいて、権威を示すことがない。

「権威的な親」: この二つのタイプと対照的に、自信に満ちた権威とその理由付け、公正さ、そして愛が兼ね備えられている。

EC と CM での子育ての三つのスタイルを比較する表を作成してみた(表 参照)。

リコーナがここで紹介しているこの子育ての三つのスタイルが、EC の中で紹介している親の三つのスタイルとの相違点はあるのかを検討した結果を示す。

- (1) 親の三つのスタイルを表示する英単語は同じである。
- (2) 三つのスタイルに対して、リコーナが認めるのは、権威的な親である。
- (3) リコーナがこの二冊の著書 EC と CM で、親の三つのスタイルに対する説明を比較すると、リコーナが違う言葉で説明していることを分かった。なぜ、リコーナが、親の三つのスタイルに対する説明を違う言葉で用いるのかを検討する必要がある。

表 子育ての三つのスタイル (筆者作成)

	EC	CM
権威的な親	子どもに服従を求めるが、自分たちの要求に明確な理由を与える。	自信に満ちた権威とその理由づけ、公正さ、そして愛が兼ね備えられている。
自由放任の親	ルール設定や宗教・道徳上の罪の言及を嫌う。	子どもをかわいがってばかりいて、権威を示すことがない。
権威主義的な親	コントロールの面では厳しいが、ルールの説明や従順をすすめる際の理由づけではあまりはっきりしない。	命令と脅しを多用して、子どもに理由を説明することがほとんどない。

3 子どもを愛す

非常に多くの調査研究によって、子どもの健康的な発達のために親の愛が重要であることが証明されている。愛されることによって、子どもたちは、安心感や、存在意義、自己に対する肯定的な価値を感じることができる。親の愛を感じると、子どもは親に情緒的な愛着を感じる。このような愛着を持つことで、子どもたちは、親の権威に答え、親の価値を受け入れるようになる。

「愛とは、子どもと一緒に時間を過ごすことを意味する。特に一对一の時間は重要である」²⁰⁾とリコーナは述べている。一对一の時間を作るためには、その時間を計画しなくてはならない。どれだけの時間を過ごすかということは、どのように時間を過ごすかということと同様に重要なことである。

(1) 愛情としてのコミュニケーション

「愛情の質は私たちのコミュニケーションに表れます。単に時間を作ったからといって、自然と良いコミュニケーションができるわけではない。考えていることや経験について意味のあ

る会話をするには、意図的にそうなるようにする必要がある」²¹⁾とリコーナは述べている。

ここでは、リコーナは家族の食事時間を例として挙げている。家族の食事時間で良い会話をするためには、「良い話題」が必要になる。例えば、「今日起こった気分のよくなる出来事」、「これまでにしたことのない経験」、「家族に力になってほしい問題」などである。このような子どもとのコミュニケーションは、お互いの信念や価値観を共有しあうよい機会となる。

(2) 自己犠牲的な愛

「自分の子どもを愛するということは、子どもたちのために犠牲をいとわないことである」²²⁾とリコーナは述べた。責任のある親になるということは、子どもを育てる間、自らのことを二番目に考えることを意味している。結婚生活において避けることができない苦難を持ちこたえることが、子どもたちに対する最大の愛情であり、最大の犠牲であるともよく言われる。

それゆえに、私たちは、子どもには両親がいて、同じ屋根の下で暮らすほうが良い、ということをおぼえてはいけない。夫婦間の愛情は、子どもの安心感や、その子の生活の全般に良い影響を与える。そして、良い時も悪い時も一緒に過ごすことを通じて、私たちは子どもたちに結婚することの意味についてきわめて重大な教訓を与えることができる。

4 模範となって教える

「模範 (example) となって教えるとは、子どもを愛し尊重することもするが、それだけではない。それは夫婦がお互いにどのように接するかということにも関係してくる。なぜなら、子どもたちは両親のやり取りを数え切れないほど側で見ているからである。...(中略、引用者)... 親戚や友達、近隣の人、先生などの家族以外の人たちとどのように接するのも、子どもへの模範となる」²³⁾とリコーナは述べている。

例えば、生命の尊重、戦争と平和、環境問題、貧困層の人たちの苦境など、日常的な道徳問題に関する私たちの意見を子どもたちに示すことによって、子どもたちは、私たちが何を心より大切にしているかを知るようになる。このようになることは、子どもたちに私たちの大切にしている価値や、品性を備えた人生が重要なことを伝えるにあたってとても大事なことである。「私たちの信念を持った行動や、世間の風潮に立ち向かう姿勢を、子どもたちが見たことがないのであれば、子どもたちに友達からの悪い誘いに立ち向かう勇気を持つことを期待することなどできない」²⁴⁾。

5 道徳的な環境を作る

何世代か前までは、家族はより大きな社会環境の中に存在していて、親が子どもへと伝えようとしている価値観を社会環境が支えていた。しかしながら、もはやそうではない。「今日では、

メディアや市場文化(marketplace culture)などの社会環境との戦いは止まるところを知らない。...(中略、引用者)...このような状況に対して、テレビ番組、ゲーム、インターネットからのダウンロードなど全てにおいて、子どもは親から許可をもらう必要がある」²⁵⁾。このようなメディアと関わる権利は、子どもにあるわけではなく、親から与えられる特権(privilege)とすべきものである。

「また一方で、教育的なアプローチとして、ただ単に禁止するものではなく、道徳的な説明をしてあげることが重要である」²⁶⁾。理由をはっきり言わないまま禁止するのであれば、子ども達の良心や自制心を発達させることなく、ただ怒らせるだけになるだろう。

以前と比べて現代では、道徳的な環境を整えるために、子どもたちをよく見ていなくては行けない。親は子どもの行動を監視するのに苦労しているが、子どもを悪い誘いから遠ざけるのに効果がある。「ルールを決める」、「子どもたちの活動や行動、友達についてよく知っている」、「子どもを年齢相応に管理する」というような面倒見の良い親の子どもは、性行為、薬物、アルコール、タバコの全てにおいて、同世代の子どもよりも経験する割合が低いことが明らかになっている。

「子どもたちを危険なものから守ると同時に、私たちは精神を発達させるような、高貴な、そして英雄的なものに子どもたちが触れられるように努めるべきである」²⁷⁾。実際には、高潔さ、勇敢さ、あるいは思いやりを示す新聞記事や、子どもたちの善い模範となるような、品性の向上をテーマとしたたくさんの映画、及び子どもたちの心の中や想像の世界にすばらしい品性が宿るような何百冊の本も子どもに紹介されている。

これまで述べてきた1から5までの原理は、親自身の子育て意識や親自身の道徳性のレベルを高めることに関わる原理である。6から11までの原理は、親が子どもに教えるべきことや教え方に関わる原理である。

6 直接的な指導によって、良心と習慣を形成する

「私たちは子どもたちに教えていることを実践する必要があるし、同様に、実践していることを教える必要がある。道徳に関して直接的な指導をすることにより、子どもたちの良心や生活の習慣を形成することができる」²⁸⁾とリコーナは述べている。

直接的な道徳の指導には、「どうぞ、ありがとうなどの挨拶をしなさい」、「邪魔をしてはいけない」、「話している時は相手の眼を見なさい」などのマナーが含まれている。このような何百もの指導によって、子どもたちは、「振舞い方」や「生き方」を理解するようになる。

直接的な道徳の指導には、あることがなぜ正しいのか、あるいはなぜ間違っているのかを説明することが含まれている。例えば、なぜ嘘をついてはいけないのか。それは嘘をつくことで信頼を失い、信頼はあらゆる関係の基礎であるからである。このような理由づけをすることに

よって、子どもたちは良心を持つようになり、してはいけないこととしなくてはならないことについて、自分でその理由を考えることができるようになるのである。この心の中の良心の声が、子どもに何か悪い誘惑があり、かつ親が周りにいない時に、大きな力を発揮するのである。ここで、リコーナは、「正しいことを教えるために間違っていることが起こるのを待ってはいけない」²⁹⁾と強調している。

直すべき行動について、肯定的な代替案を示すことも、直接的な指導の一部である。肯定的な代替案となる新しい行動が定着するには、親は子どもの行動に忍耐強く何度も注意し、また子どもに実践させなくてはならない。

品性に関するものへと子どもを導くこと、例えば、良い本、パンフレットなど身近な問題について考えさせるものを与えることも、直接的な道徳の指導である。特に十代の青年期には、そのようなものに触れることによって、親の見解が妥当であると理解する傾向がある。

ここで、リコーナが直接的な指導を説明しているが、間接的な指導は何であるのか、リコーナは間接的な指導をどう考えているか、という疑問を私は抱えている。

7 正しい判断を教える

リコーナは、「正しい判断ができるということは、高い品性を持つための大切な条件である」³⁰⁾と述べている。したがって、子どもに思慮深い判断力をつけさせることは、正しいことと間違ったこと、またその理由を教えることによって、良心を形成して初めて成り立つのである。

リコーナは「子どもの判断力を発達させるとは、ある特定の行動を評価できる質問を用いるように教えることである」³¹⁾と述べ、子どもたちが活用できる9つの道徳の質問を挙げている。

(1) 黄金律 (The Golden Rule) (可逆性) (reversibility) の質問

これと同じことを他の人からされたらどうだろうか。

(2) 公平性 (fairness) に関する質問

私の言動は、それによって影響を受ける可能性がある全ての人にとっても公平だろうか。また、誰がどのような影響を受けるだろうか。

(3) 「みんなが同じことをしたらどうなるだろうか」という質問

他の全ての人がそのことをしたらどうなるだろうか。また、そのような世界に住みたいだろうか。

(4) 正しさに関する質問

この行為は本当に正しいだろうか。正しくないことが何も含まれていないだろうか。

(5) 親に関する質問

私のしたことを親が知ったらどのように感じるだろうか。どのようにすればよいかを親に尋ねたならば、親は何と答えるだろうか。

(6) 信仰に関する質問

これは自分の信仰に反することではないだろうか。

(7) 良心に関する質問

これは自分の良心に反することではないだろうか。後で罪悪感を感じるのではないであろうか。

(8) 行為の結末 (consequences) に関する質問

これによって、今後、人間関係が壊れたり、自尊心が傷つくなどの悪いことがおきないであろうか。これをしてしまったら後で後悔しないだろうか。

(9) 「新聞の一面に載ったら」という質問

もし私の行動が地方新聞の一面に載ったら、私はどのように感じるだろうか。

これらの9つの質問に対して、「もちろん、子どもたちがあらゆる倫理上の判断をする際に、これら全ての質問を活用することはないであろう。しかし、このうちのいくつかを活用するのであれば、衝動的に、あるいは余りよく考えずに行動したときに比べて、はるかに良い判断ができるはずである」³²⁾とリコーナは述べている。

この9つの質問のほか、リコーナは5つの問題解決法も挙げている。

どのように行動するのが最善か、すぐに分からないようなジレンマ場面に遭遇した時、またはさらに困難な状況においては、以下のような手順を踏むことで、良い判断を導くことができる。

(1) 代替案 (alternative) を考える

この問題を解決するために、何か他の方法はないだろうか。

(2) 起こりうる結末の軽重を考える。

さまざまな選択肢を実行した場合、自分を含んだ関係者たちに、良い影響を与えるものは何か、また悪い影響を与えるものは何か。

(3) 道徳上の価値を明確にする。

どのような道徳上の価値が関係しているだろうか。またそれらの中でより重要なものは何か。

(4) アドバイスを求める。

親、先生、兄、姉など、このような状況においてどのようにすべきかを教えてくれる人はいないか。

(5) 判断をする。

どのようにすれば、重要な価値を尊重し、また影響を与える人に対して、できるだけ良い結果を与えることができるだろう。

この中で、アドバイスを求めることは特に重要なこととして、子どもたちに強調しておくべきであろう。おとなでさえも、思慮深い人ならば、特に難しい問題に直面した際は自分だけで

判断することは無く、少なくとも一人は尊敬する人の意見を聞くということを子どもは知っておくべきである。

「最後になりますが、重要な判断ほど、すっきりとして落ち着いた気分の時に行われるべきことも子どもに伝えておかななくてはならない」³³⁾とリコーナは強調している。疲れている時、ストレスがたまっている時、怒っている時には、物事を判断するべきではない。また、判断を急ぐことも避けた方がいいであろう。

8 賢くしつける

「多くの家庭では、しつけが上手くいっていないために、道徳教育が崩壊しているのである。賢くしつけるためには、目標を設定し、子どもにその目標を達成する責任感を与える」³⁴⁾とリコーナは述べている。そして、子どもたちの過失に対しては、「正しいことは何か」、「正しいことをするように動機づける」という二点から対応するのである。

子どもをしつける際には、してしまった過ちの重大性を理解させ、二度と同じ過ちを起さないように動機づけることが求められる。

多くの場合、罰を与えられた時に、その状態を回復することが重要になってくるし、そうすることによって、子どもたちは、悪いことをした時には、それを償うために良いことをしなくてはならないことを学ぶ。

可能である限り、共感に関するしつけも行うべきである。子どもの共感性を高めるには、他者の視点を取らせるような質問が有効である。そのような質問の例として、「このような場合、あなたはどんなことがしてあげられると思うか」、「何であなたをがっかりしていると思うか」、「彼女の気分をよくするためにどんなことができると思うか」などがある。

9 葛藤を公平に解決する

家庭生活に家族同士の葛藤はつきものである。家族関係を壊してしまうような怒りなどの悪い感情も起こりえる。しかしながら、家族同士の葛藤に上手く対処できれば、家族の絆はいつそう強くなり、子どもたちの品性を向上させる機会にもなる。

方法の一つは、公平に対処するということである。

公平性のアプローチは次の三つの要素から成り立っている。相互に理解しあう、公平でお互いに納得した解決法を採用する、後日、採用した解決法が妥当であったかを話し合う機会をもつ、の三つである。

この公平性のアプローチは、十代の若者やもっと年少の子どもたちに適用することができる。このアプローチを適用するのに、早いに越したことはない。

この公平性のアプローチを用いて対立関係を修復することによって、子どもたちは、他者の気持ちを聞くことによってその人を尊重する、他者の立場に立つことができる、家族内の問題を解決することに積極的に関与し、家族の調和を維持する、という三つの点で発達を促すことができる。

公平性のアプローチを用いた家庭では、そうでない家庭に比べて、青年期の子どもがいっそう協力的になり、さらに他者のニーズをいっそう理解する傾向が強いことが明らかになっている。

10 徳を実践する機会を提供する

「全ての徳は実践を通じて発達する。単に徳に関する話をしたからといって、子どもたちの徳が発達するわけではない。...(中略、引用者)...私たちは子どもたちにさまざまな方法で、徳を実践する機会を提供することができる」³⁵⁾とリコーナは述べている。

ここで、子どもたちに徳を実践する機会を提供することについて、リコーナは二つの方法を紹介している。

まず第一に、家事、庭の手入れ、食事の準備と片付け、妹・弟の世話などの家事を手伝わせることによって、私たちは家庭生活において、子どもたちに真の責任を与える機会を提供することができる。

子どもたちが責任を持ってすべきもう一つの方法は、学校の生活にベストを尽くし、一生懸命勉強するということである。宿題もまたこの中に含まれる。子どもたちには、宿題が単に成績を上げるための手段ではなく、自分自身を律すること、楽しみの前に義務を果たすことなど、高い品性を形成する良い機会であることを理解させるべきである。

11 精神面での発達を促す

大多数の若者が、薬物に依存した五年間の成功と人生全般とを交換するという話を聞いて、私たちはどのように感じるだろうか。若者は精神的な支え (spiritually) を失い漂っている状態である。

「長い歴史を振り返ると、多くの人々にとって、なぜ自分たちが存在するのか、また自分たちは何を目指すべきなのか、という生き方の問いに答えてきたものは宗教であった。非常に多くの人に対して、宗教は、生きる意味や『神がそれを望んでいるから』という道徳的な生活を送るための究極的な理由を提示してきた」³⁶⁾とリコーナは述べている。

ここで、リコーナは、信仰を持つ親と信仰を持っていない親は、子どもたちに信仰を持たせるためどのようにしていいのかについて、以下のように説明している。

T. リコーナにおける道徳教育の11原理の検討(倪)

毎週の金曜日の夜に休息日を祝うろうそくに火を灯すなどの宗教的な儀式や、食後に家族全員で伝統的な感謝のお祈りを唱えるなどの「実践を積み重ねることによって、善い人になることは、道徳上とても大事なことであるという考え方や見方を形成していくのである」³⁷⁾。

「教会へよく通っている人は、自らを傷つける行為や反社会的な行為を踏みとどまる傾向が強いようである。...(中略、引用者)...成人に対する研究でも同様な結果が得られている」³⁸⁾。

「神への信仰心を持たない若者にとって、お金や性的な快楽、権力、名声、あらゆる犠牲を伴う成功など、現代の文化には無数の誘惑がある」³⁹⁾。

「たとえ、これまで述べてきたこと全てを首尾よく成し遂げた親でさえ、(つまり、品性の発達を優先し、子どもたちを愛し、よい模範となって、良いしつけをし、精神の発達を促した親でも)、子育てを世の中で最も難しいものと感じる人がいるでしょう。私たちがそうであったように、子どもたちもまた、成長していく過程の中で、間違いを起こすものである」⁴⁰⁾。

「子どもたちを強く、よい人間へと育てるために多くの機会を最大限に活用することもまた親である私たちの仕事なのである。何についてもそうであるが、品性の発達もまた家庭から始まるのである」⁴¹⁾。

四 著書2冊の比較

リコーナは、ECとCMという2冊の著書で、家庭教育に対する考え方を述べていた。この2冊の著書で、リコーナの考えの共通点が何であるのか、相違点が何であるのかについて、明らかにする。

1 著書2冊の対照

(1) 共通した見解

親は子どもの道徳性の発達に重要な役割を持つ。

ECの中で、リコーナは、親の役割を果たさないと、子どもの道徳性の発達に与える影響を論じている。CMの中で、氏は、どのように親が持つ役割を果たせばいいか、つまり、道徳教育の11原理を論じている。

子どもの道徳性を発達させることは親の最も優先事項である。

ECの中で、リコーナは、親の役割を果たさない親が、子どもの道徳性を発達させることを最優先事項にしてないと述べている。CMの道徳教育の11原理の中で、氏は、子どもの道徳性を発達させることは親の最も優先事項にせよと強調している。親は子どもを愛する。

EC と CM という 2 冊の著書の中で、いずれも、親の子どもに対する愛情は、子どもに安心感や、存在意義や自己に対する肯定的な価値を感じさせることができるとリコーナは述べている。また、親の愛を感じると、子どもは、親の権威に応え、親の価値を受け入れるようになる。

親子間のコミュニケーションは大切である。

EC の中で、リコーナは、親が親子間のコミュニケーションを図れない場に子どもを置いている親は大勢であると述べている。CM の中で、氏は、親子間のコミュニケーションは、単に時間を作って、子どもとのコミュニケーションではなく、考えていることや経験について意味のある会話を意図的にする必要があると述べている。

権威的な親になって、模範として、子どもに道徳を教える。

EC の中で、リコーナは、多くの親が子育ての決定的な必要物 自分自身の権威に対する自信を失ってしまったと指摘した。CM の中で、リコーナは、親は確固とした道徳上の権威となり、つまり子どもから尊敬され、子どもが親の言うことを聞くようにならなくてはならないと述べた。また、EC と CM の中での子育ての三つのスタイルに対して、リコーナが認めるのは、権威的な親である。

(2) 相違した見解

EC の中で、リコーナは、離婚や親子間の親密関係を持たなくなるによって、子どもの道徳性の発達に及ぼした影響を論じているが、子どもの道徳性を発達させるために、親がいかに親の役割をよく果たせばいいかを論じなかった。CM の中で、リコーナは道徳教育の 11 原理及び教え方を論じている。この相違点から、リコーナの家庭における道徳教育に対する考え方は、親が自分の役割を果たさないと、子どもの道徳性の発達にもたらすマイナス影響という観点から、親の道徳性を高めることと、親が子どもに道徳を教える方法に重んじるようになってきていることが明らかになった。

子育ての三つのスタイルに関して、リコーナは、この二冊の著書両方で述べている。しかしながら、リコーナがこの二冊の著書で親の三つのスタイルを説明する際に用いた言葉は違っている。

2 家庭で、「教える」ことと、「しつける」こととの比較

この道徳教育の 11 原理の中で、リコーナは子どもの道徳性を発達させるために、親が子どもに「教える」ことと、「しつける」ことを紹介している。

この二つとも、子どもの道徳性を発達させるための親の教え方である。これが「教える」こ

とと、「しつける」ことの共通点である。

「教える」と、「しつける」との相違点は何であるのか。

ア 英単語は違う。

「教える」が「teach」である。「しつける」が「discipline」である。

ウ 内容は違う。

「教える」内容は、「正しい」判断である。

「しつける」内容は、責任感、共感などである。

家庭における道徳教育は、教えることとしつけることの両方が必要であることが明らかになった。

五 研究のまとめ

リコーナは、ECとCM二冊の著書で、家庭における子どもの道徳教育家であり、道徳教育の教師でもある親の役割を論じている。特に、CMの中で、親がどのようにすれば、自分の子育ての意識を高め、長期的な視野をもって、子どもをよいおとなにしていくために、子どもを愛し、子どもを大事にし、子どもの模範になって子どもに価値を教えるという親の役割を果たすことに関して、氏は道徳教育の11原理を挙げて説明している。

CMの中で、リコーナは、「私たちが維持したり、子どもたちに教えたりする標準(standards)を含む私たちの子育ては、子どもたちの道徳性の発達と行動に深い影響を与える。私たちが高い標準を設定しなければ、子どもたちは、未成熟な欲求や、仲間と文化からの消極的なプレッシャーに見捨てられるであろう」と述べているが、この「標準」、あるいは「高い標準」の中味はいったい何であるのかを、氏ははっきり書いてない。リコーナが述べている道徳教育の11原理を検討することによって、私は、リコーナが述べている「高い標準」を以下のように理解している。

親が設定する必要がある「高い標準」には、親が自分の子育ての意識と自分の道徳性を高める「標準」だけでなく、親の教え方を高める「標準」も含まれている。

私は、リコーナの道徳教育の11原理を検討するとき、これらの11原理を親自身の子育て意識や自分の道徳性のレベルを高めることに関わる原理と、子どもの道徳性を高めるのに親が子どもに教えることとしつけること、及び教え方に関わる原理の二つに分けて吟味してきた。そして、親自身の子育て意識や自分の道徳性のレベルを高めることに関わる原理は、親が自分の子育ての意識と自分の道徳性を高める「標準」であり、子どもの道徳性を高めるのに親が子どもに教えることとしつけること、及び教え方に関わる原理は、親の教え方を高める「標準」であると理解している。

ECの中で、リコーナは、家庭において、「大勢の親は多忙なスケジュールのもとにあり、親

子差し向かいのコミュニケーションを図れない場に子どもを置いている」という親の子育ての薄い意識と、「多くの親は子育ての決定的な必要物 自分自身の権威に対する自信を失ってしまった」という親がもつ価値の混乱などのことを指摘している。これらのことに対して、親の子育ての意識を高め、権威ある親になり、模範として子どもに価値を教えるために、親が自分の子育ての意識と自分の道徳性を高める「高い標準」を設定する必要がある。親自身の子育て意識や自分の道徳性のレベルを高めることに関わる原理には含まれている 品性を育てることを優先する、 権威のある親になる、 子どもを愛す、 模範となって教える、 道徳的な環境を作る、の五つの原理は、いずれも親が自分の子育ての意識と自分の道徳性を高める「高い標準」である。

親が子育てすることを優先し、子どもを愛する感情を持ち、権威を持ち、模範として子どもに価値を教えるようになれば、子どもの道徳性を高めるために、親が子どもに何を教えるか、どのように子どもに教えていいのかも、大切になる。子どもの道徳性を高めるために親が子どもに教えることとしつけること、及び教え方に関わる原理に含まれている 直接的な指導によって、良心と習慣を形成する、 正しい判断を教える、 賢くしつける、 葛藤を公平に解決する、 徳を実践する機会を提供する、 精神面での発達を促す、の六つの原理は、親の教え方を高める「標準」である。

それゆえに、リコーナが家庭教育において、長期的な視野をもって、子どもを社会に通用するおとなにしていくために、親の子育ての意識を高めることと親の子育て方法を高めることを重んじていることが明らかになった。

< 注 >

- 1) Thomas Lickona ; 1991., *Educating for Character How Can Our Schools Teach Respect and Responsibility* , BANTAM BOOKS, p.35.
三浦正訳.;1997年,『リコーナ博士のこころの教育論 尊重と責任を育む学校環境の創造』, 慶応義塾大学出版会, 38頁。訳語は一部変更してある。
- 2) Thomas Lickona ; 2004., *Character Matters How to Help Our Children Develop Good Judgment, Integrity, And Other Essential Virtues* , A TOUCHSTONE BOOK, p.59.
水野修次郎, 望月文明訳.;2005年,『「品性教育」のすべて 家庭・学校・地域社会ですすめる心の教育』, 95頁。訳語は一部変更してある。
- 3) CM, p.35. 同訳書, 61頁。訳文は一部変更してある。
- 4) EC, p.30. 同訳書, 33頁。
- 5) EC, p.30. 同訳書, 33頁。訳文は一部変更してある。
- 6) EC, p.30. 同訳書, 33頁。訳文は一部変更してある。
- 7) EC, p.30. 同訳書, 33頁。訳文は一部変更してある。
- 8) EC, p.32. 同訳書, 34頁。訳文は一部変更してある。
- 9) EC, p.32. 同訳書, 35頁。
- 10) EC, p.33. 同訳書, 36頁。
- 11) EC, p.33. 同訳書, 36頁。
- 12) EC, p.34. 同訳書, 37頁。
- 13) CM, p.34. 同訳書, 60頁。訳文は一部変更してある。
- 14) CM, p.34. 同訳書, 60頁。訳語は一部変更してある。

T. リコーナにおける道徳教育の11原理の検討(倪)

- 15) CM,p.34. 同訳書,61 頁。
- 16) CM,p.35. 同訳書,61 頁。
- 17) CM,p.35. 同訳書,62 頁。
- 18) CM,p.35. 同訳書,62 頁。訳語は一部変更してある。
- 19) CM,p.36. 同訳書,63 頁。
- 20) CM,p.38. 同訳書,37 頁。
- 21) CM,p.39. 同訳書,37 頁。
- 22) CM,p.40. 同訳書,37 頁。
- 23) CM ,pp.41 ~ 42. 同訳書,37 頁。
- 24) CM,p.42. 同訳書,71 頁。
- 25) CM,p.43. 同訳書,72 頁。
- 26) CM,p.43. 同訳書,72 頁。
- 27) CM,p.44. 同訳書,73 頁。
- 28) CM,p.44. 同訳書,74 頁。
- 29) CM,P.45. 同訳書,75 頁。
- 30) CM,p.47. 同訳書,77 頁。
- 31) CM,p.47. 同訳書,77 頁。
- 32) CM,p.48. 同訳書,78 頁。
- 33) CM,p.49. 同訳書,80 頁。訳語は一部変更してある。
- 34) CM,p.50. 同訳書,81 頁。
- 35) CM,p.55. 同訳書,89 頁。
- 36) CM,p.57. 同訳書,92 頁。
- 37) CM,p.58. 同訳書,94 頁。
- 38) CM,p.57. 同訳書,92 頁。
- 39) CM,p.57. 同訳書,92 頁。
- 40) CM,p.59. 同訳書,95 頁。
- 41) CM,p.59. 同訳書,95 頁。

主指導教員(齋藤勉教授) 副指導教員(栗原隆教授・雲尾周 准教授)